

新様式ソーシャルアートビューがひらく新たな地域活動スタイル —目の不自由な方と心の目でみる対話型絵画鑑賞の意義—

林 賢

1 はじめに

1.1 本研究の端緒になった出来事

それは5年前にNさん達と一緒に横浜美術館へ行ったことである。Nさんは視覚障害者。そしてNさんのガイドヘルパー1名、5名の晴眼者（私を含む一般参加者）、全員で7名であった。

Nさんの案内スタイルは15分程度で館内を見て回り、好きな絵画を選んできて、皆と対話していく。そしてNさんが質問を重ねていく。

目がみえなくても、イメージができるまでアートを介して対話を続けていく。『客観的に』何がみえているか。絵画の外形的な質問や表現の交換が続いたあとに、全員が平等に他の参加者の表現もふまえて、こんどは『主観的に』感じたことを対話していく。

「この絵から気づいたこと、考えたことはなにか」「画家の意図は何か」など根源的な対話にうつっていく。

一点の絵画にかける時間は15分から20分程度だが、7名が5点のアートを介して対話を終えたとき、独り鑑賞ではけっして得ることのできなかつた多様な視点に気づき、新しいイメージや物語の気づきを創ることが出来、心がふるえる瞬間を体験した。

1.2 問題意識——人はイメージをどのようにして創るか——

全盲でありながら、対話型絵画鑑賞のナビゲーターをするというNさんのことは5年前にラジオ番組で知った。

最初の疑問は「いったい、どのように絵画をみるのか……」それから、目の不自由な、見えない方が何故、絵画鑑賞をするのが不思議でした。疑問を抱きつつ「お会いしたい」とNさんにSNSで連絡してみました。予想に反して、直ぐにリターンメールがあり、お会いする日をその日のうちに決めることができた。

「何が見えるのか」、「何のためにやっているのか」を訊きたい……。

事前に入手していたNさんの情報は以下のようなことだけであった。

- 39歳のときにバイク事故で失明し、全盲に。
- 事故前はCGデザイナーとして活動していた。
- 事故後に鍼灸や薬膳を学びプライベートキッチン付きの鍼灸サロンを開設。

Nさんのサロンを緊張の中に訪ねた。訊くと、事故後はひとつひとつを学び直し、「過去にもどらないように前を向いて生きてきた」と語ってもらいました。家族、友人、福祉の関係者のサポートを受けて、点字、白杖、鍼灸、薬膳の勉強をへて、現在の生活につながった。

- 「美術館では、対話のなかから新しいイメージが出来る楽しさがある」

- 「次の活動テーマの糧になる」

苦勞を感じさせない話ぶりでしたが、美しいサロンのインテリアデザインや清らかな空気感がNさんのこれまでの生き方を想像させる極上空間であった。

1.3 探求すべき課題認識

このNさんとの出会いの後、筆者は2017年度から「ソーシャルアートビュー/Social Art View」（以下SAVと記す）¹⁾を実施してきた。これは筆者が命名した、目の不自由な方と共にみることを目的とする対話型グループ絵画鑑賞（ワークショップ、イベント、研究会など）のことである。芸術作品を見るグループと作品を見ない/見ることができないグループに分かれ、グループ間で対話をしながら作品を見ているグループが、言葉でその作品を見えないグループに伝えていく。プログラム開発のためのアートワークショップも行う。

SAVは健常者（晴眼者）だけで楽しむ活動ではなく、視覚障害者や他の耳の不自由な方や弱者の方そ

して多世代の交流をねらって、作品に描かれていることやそこから感じたことについて自由に対話を重ねることで新しいイメージ、とらえ方に出会うことを目指す(商標登録 登録第 6225167 号)。目が不自由であるということを他人事ではなく、自分事として考えたとき、一般参加者だけの「対話型絵画鑑賞」活動ではなく、SAV(目の不自由な方と共に心の目でみる対話型絵画鑑賞)という視点をもって、毎年度、3つのステップ(準備、啓蒙、本番)で、3年間アートコミュニケーション活動をしてきた。

そして 2020 年度は、下記のリサーチクエッションをもち、新型コロナ対策で非常事態宣言の発出や対面型のリアルイベントが制限されたこともあり、新様式アートコミュニケーションを企画・実施する。

リサーチクエッション

- ① リアルに行ってきた SAV が(オンラインやオフラインとの組み合わせで)新様式アートコミュニケーションとして成立するか仮説をたて検証する。
- ② 新様式 SAV を含むアートコミュニケーション活動がまちづくりのためのコミュニケーション活動にどのように役立つかを考察し提案する。

第 2 章では対話型絵画鑑賞の基本ともいえるメソッドの VTS (Visual Thinking Strategy) や哲学対話の考え方を概観し、アートを介したコミュニケーションの意義を考察する。

第 3 章ではこれまで行ってきた SAV の成果を分析する。

第 4 章ではこの活動の先達者である、全盲で対話型絵画鑑賞のナビゲーター N さん、ソーシャルデザインプロジェクトのトップリーダーで学芸員の I さん、新様式 SAV に参加したステイクホルダーの市民、インターン生にヒアリングを行い、従来の SAV とも比較して、新しい地域活動の方向性を考える。

第 5 章では今期の新様式 SAV の実践内容を記録、分析して、今後のまちづくりコミュニケーションにどのように役立っていくかを考える。

第 6 章では新様式 SAV 活動実践から新様式の SAV の可能性を探る。

第 7 章は、市民の地域活動の場づくりとアートコミュニケーションの活用提案を行う

おわりに、第 8 章として今後の課題を述べる。

2 アートを介したコミュニケーションの意義

本章では SAV のねらいを確認するため、対話によって何が起こるか Visual Thinking Strategy/ 視覚的思考方略(渡辺 2011: 493、以下 VTS と記す)から考察する。

1990 年の少し前あたりから VTS の開発に先立ち、フィリップ・イエナウインは従来のニューヨーク近代美術館(MoMA)の美術鑑賞プログラムを全面的に見直した。そして渡部晃子の研究によれば、問いを立て「考える」ことを中心にすえる対話型絵画鑑賞のカリキュラム開発を子どもたちのための美術館ガイド『Stories』でスタートした。

(中略)『Stories』の文章は極力抑えられていて、作品がページの大部分を占める構成になっている。もう一つは鑑賞者の思考を促すためには、考えるための「問い」を立てる必要性があり、質問をすることに焦点を絞っている。『Stories』に書かれたわずかな文章は、ほとんど質問から成っており、読者に語りかけるようになっている。このことで読者は、単に作品を見るだけでなく、作品を通して「考える」ということが可能になっているのである。(渡部 2011: 500)

VTS は対話を通じてアートにアプローチする対話型鑑賞教育/視覚的思考方略のことである。渡辺によると、ニューヨーク近代美術館(MoMA)の教育部長であったフィリップ・イエナウインとアビゲイル・ハウゼンによって VTS は 1990 年代初頭より開発されてきた。

VTS では主に質問、言い換え、関連づけ等を用いて議論を展開していく。VTS の最も基本的な質問の型は下記のとおりである。

〈3つの質問〉

- ① 「この絵の中で何が起きていますか? (What's going on in the picture?)」

② 「何をみてそう思いますか? (What do you see that makes you think say that?)」

③ 「他にになにか教えてくださいか? (What else can you tell me?)」

「他にになにか気付いたことは? (What else can you find?)」

(渡部 2011 : 496-497, 長井 2011:301)

3 つの質問の型はファシリテーターが鑑賞者の芸術作品に対して臆することなく対話することを引き出す基本フレーズである。

2.1 哲学対話とソーシャルアートビューの共通性について

障害の有無、世代、性、国籍、住環境などの背景や習慣の違いを超えた多様な人々の出会いによる相互作用を、表現として生み出すアートプロジェクトとして TURN³⁾がある。2020 年『想像を広げる TURN JOURNAL-SPRING 2020』梶谷信二「<アート×哲学対話>がひらく共生の新たな可能性」pp. 28-29 によれば、「アートプロジェクト」²⁾における地域を活性化させようとする取り組みや哲学対話の内容は下記の 8 つのルールで共通すると述べている。

これは SAV でアートを介してその場の情報で考え、コミュニケーションしていき、新しい視点や刺激を与えるスタイル。すなわち、観て・問う（訊く）、考える、話す、感じる（イメージする）というサイクルをぐるぐると回していくスタイルにおいて、全く同じルールで進行することが出来る。

<8 つのルール>

- ① 何をいってもいい。
- ② 人の言うことに対して否定的な態度をとらない。
- ③ お互いに問いかけるようにする。
- ④ 発言せず、ただ聞いているだけでもいい。
- ⑤ 知識ではなく、自分の経験にそくして話す。
- ⑥ 意見が変わってもいい。
- ⑦ 話がまとまらなくてもいい。
- ⑧ 分からなくなってもいい。

ルール①は、もっとも重要なルールである。何を言ってもいいところにしか、思考の自由はない

ルール②は、自分が肯定されるか否定されるかを気にせずにいられれば、自由に話ができる……。

ルール③は、問うことで思考は前に進み、積み重なる。……問うことで私たちは、お互いにきちんと向き合う。そして問われることで自分自身にも向き合い、自分の考えの前提を改めて問い直すきっかけになる。

ルール④は、その人が話したくなる時まで待てばいい。話さない自由がなければ、話す自由もない。だから何でも言っているように思ったら、話したくなければ話さないというルールが必要になる。

ルール⑤は、多様な人が参加するため特に重要である。知識に依拠しないのは、対等であるために非常に重要なことなのだ。

ルール⑥は、自分の立場を固定せず、意見を自由に変えることができれば、物事をいろいろな角度から考えることができ、思考の幅を広げてくれる。

ルール⑦と⑧は、気楽に話すためのルールである。

(梶谷信二 2020: 28-29)

・ソーシャルアートビューのルールとの共通性のまとめ

SAV では目の不自由な方のイメージを想像して対話をするため、どの表現が伝わるのか。今はどんなふうイメージが形成されているのだろうかと言言が滞ってしまうこともあるが、これは哲学対話の 8 つのルールのうち④発言せず、ただ聞いているだけでもいい。⑤知識だけではなく、自分の経験にそくして話す。というルールに則った状況ともいえる。

アートを介することでの対話なので、ルール⑥意見が変わってもいい、⑦話がまとまらなくてもいい、⑧分からなくなってもいい。は自然に場の雰囲気があるような感覚を容認していくこととなる。SAV は哲学対話を自然に促す働きがあるとも言える。

地域活動の入口として SAV 活動をしていくとき、地域を活性化させようとする取り組みのひとつとして、多様性のある社会、人々を理解していく機会となり、「ソーシャル・インクルージョン(社会的包摂⁴⁾)」、「地域包括ケアシステム⁵⁾」の活動ともとらえられる。

2.2 アートを介したコミュニケーションの意義

様々な地域活動に参加してきたが、そのなかにはコミュニケーションや対話の時間をとることよりも、イベントの行動部分に興味集中してしまいがちになるコトが多々ある。SAV のアートを介して輪をひろげコミュニケーションする役割はとても大きい。

対話により、共感を重視したとされる、カール・ロジャース／畠瀬直子監訳「人間尊重の心理学——わが人生と思想を語る——」で、他者とのコミュニケーションについてこのように語っている。

他者との交流に於いて、喜びを感じ心が温まる満足できる経験があります。また、あとあとまで喜びを感じられない、近づいた感じの少ない満足が少ない経験もあります。言い換えますと、他者とコミュニケーションを持つ経験のあるものは私を強め、広げ、豊かにし、私の成長を助けます。

この経験においては相手も同じような経験を心得ており、相手も豊かになり自己成長と自己機能が前進させられているのを感じます。そして、これとは対照的に相互の成長や発達が弱められ、阻止され、より悪くされるような経験もあるのです。もう明らかだと思いますが、私は相互の成長を促進するようなコミュニケーション体験が好きですし、私も相手を萎縮させるようなコミュニケーションは避けたいのであります。(中略) 他者に聞き入る喜びは、もちろん深く聴くと言うことです。語られる言葉、思想、気持ち、その人にとっての意味、その人の意識下に含まれる意味までも聞き取ると言うことです。時には、表面に現れている話はそれほど重要ではなくて、彼の深いところに埋もれ知られていない叫びに聞き入ることもあります。(中略) 私たちが日没を心からいとおしいものは、太陽を思い通りに動かせるなどと思っても見ないからで

しょう。夕焼けを見ながら、「右側のオレンジ色をもう少しぼかして、下のほうの紫をもう少し広げて、雲はバラ色にしたいな」などつつぶやくことはありません。日没を自分の意思で動かそうとは思いません。日が沈む様を、畏敬を込めて見守ります。これと同じように、同僚、息子、娘、孫たちを見守るのが私は最高に好きなのです。こういうあり方は東洋的態度なのだと思います。私にとっては、それが最も満足できることなのです。(ロジャース／1984：6-21)

ロジャースの言う相互の成長を促進するコミュニケーションは、SAV でアートを介して、目の不自由な方とともに心の目でみてコミュニケーションをするということと近似箇所がある。その場にいる人たちに関心を持ち続け、他者と向き合い、他者の立場にたってみる、感情移入して考えてみる等の能力を養い、そして自分の考えにおもいを馳せ、コミュニケーションすることにつながるという意義がある。

3 これまでのソーシャルアートビュー活動の分析

3.1 活動の概要

2017 年より 3 年間、地域でソーシャルアートビュー (SAV と略す／目の不自由な方と共に心の目でみる対話型グループ絵画鑑賞) 活動を、準備、啓蒙、本番と段階をへて毎年このサイクルでイベントを開発・実施してきた。表 1 と図 1 を参照。

ニューヨーク近代美術館 (MoMA) のアビゲイル・ハウゼンは芸術鑑賞をする時の人々のパターンを以下の 5 つに分類している。

<5 つ観察の仕方>

- ① 外形的な特徴 (Physical properties) を知る。大きさや素材、質感、制作の方法、展示の方法など。
- ② 主題 (Subject) について考える。何についての作品かを考える。複数の主題をもつものもある。
- ③ 眼の錯覚を呼ぶような性質 (illusionary properties) はないか。遠近法のタイプや

作品のもつ構成要素に目をむける。

- ④ 形態的特質 (formal properties) はないか。色彩、線、形とフォルム、構図といったもの。
- ⑤ 見る側の視点 (viewer perspectives) はどこにあるか。アーティストが作品をみる側の人間をどこに位置させているか。
(渡部 2011:498-499)

VTS でも SAV においても、主催者やファシリテーターはイベントに参加する人達がどの段階かを意識して、対話型鑑賞する絵画を選択、準備する必要がある。そのためにはファシリテーターを行う人の役割として事前を選んで絵画を自分なりに、構造分析し、要素分解をしておく必要がある。

これまでの SAV 活動の中では、美的発達パターンを意識することはなかったが目の不自由な方ととも

に対話型鑑賞をする際の情景をおもいうかべ、接し方のステップを毎年度3つの段階（準備、啓蒙、本番）を設定して企画・実践をした。

イベント前の準備として主催者やファシリテーターは、鑑賞する絵画を選択する訳だが、参加する方々の世代と世界観などを想像し、鑑賞作品の魅力を分解するように要素や構造を調べ、解釈し、再選択する段階にはいる。

とらえ方として上記の5つの美的発達パターンの要素の他に、歴史的・社会的・時代的な要素や地理的な要素、時間、季節、場所との関連、そして鑑賞する順番なども考慮し、客観的なものと主観的な要素を織り交ぜて絵画作品を選択し準備する役割も担っている。この作業がうまく出来ていると実際の対話型鑑賞が上手く回ることが多い。

表1 準備、啓蒙、本番の各イベント

ステップ区分	VTS：対話型絵画鑑賞 (障害体験ビュー) 準備	VTS：対話型絵画鑑賞 (障害体験ビュー) 啓蒙 [※後に共感に変更]	SAV：目の不自由な方とする対話型絵画鑑賞 本番
時期 【WHEN】 いつ	・各年度の始めに サポーターやインターン生の募集・演習	・各年度の秋口に 参加の募集と理解促進のためのイベント	・秋口から年度末に かけ定期的に参加者増を狙いイベントを開催
主旨 【WHY】 何故行うのか	・視覚障害者のことを知り、視点の異なりを知るための催し ・本番/事前調査。	・ファン形成のための公開デモンストレーション ・視点の違いを知る	・視覚障害者と晴眼者が共に心の目でみる対話型グループ絵画鑑賞 ・異なりに気づく
内容/何を 【WHAT】	・SAV 開発ワークショップ	・SAV のデモンストレーション	・SAV 実施活動
スタイル 【HOW】 どのように	・視覚障害者の役割をする方が絵画をみないでするブライندスケッチ ⁶⁾ 等	・左記の内容をデモしチーム形式で楽しむワークショップ等	・視覚障害者と晴眼者が対話して絵画鑑賞を行う
対象 【WHO】 誰に	・小学生から 大学生 ・高齢者/ 地域住民 ・一般社会人/インターン生	・一般社会人 ・地域住民 (三鷹・武蔵野市など)	・視覚障害者 ・介助者 ・ガイドヘルパー ⁸⁾ ・一般社会人 (晴眼者)
開催場所 【WHERE】 どこで	・各市のコミュニティセンター ・かたらいの道 ・少人数の会議室 等	・多人数のホール ・武蔵野プレイス ・武蔵野市 市民文化会館 等	・三鷹市美術 ギャラリー ・武蔵野市立 吉祥寺美術館 ・東京都美術館 ・国立近代美術館 等

図1のように段階をふんで目の不自由な方との対話型グループ絵画鑑賞のルールや楽しさを知っていただき、本番にのぞむようにしている。準備編、啓蒙編でのVTS体験をすることで、本番でのソーシャルアートビュー（目の不自由な方と共に心の目でみる対話型グループ絵画鑑賞）での適度な緊張感のなか多様な方々との出会いから、新しい視点、物語、刺激、イメージを得ることが出来る。



図1 準備、啓蒙、本番の各イベントのプロセス（様子）をまとめた図

3.2 準備イベント

SAV 体験と本番にむけての練習をするイベント。ブラインドスケッチ⁶⁾で目の不自由な方のみえ方（イメージの形成）を試してみるワークショップである。絵を見ないで目の不自由な方の役割をする方を設定し、他の参加者との対話で頭の中に感じたイメージ、モノやコトを簡単なスケッチで表現してもらう。

下の抽象画（鑑賞した絵画／晴眼者が対話型で伝えた絵画／画家がテーマとしたのは“森の精霊”）図2とブラインドスケッチ例（視覚障害者の役割をした晴眼者が描いたイメージ）図3を参照。

5つ美的発達パターンで考察すると先ず外形的な

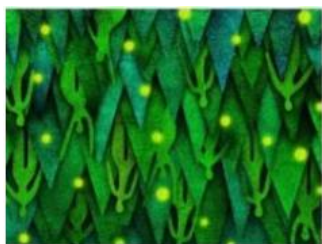


図2



図3

特徴 (Physical properties) での問いが有効性高いことなどを確認し、SAV 本番を意識して目が不自由でも、どこまで会話や言葉だけで脳内にイメージを形成できるかをブラインドスケッチで相互に確認が出来る。そして言葉だけでもイメージの形成が出来ることを体験する。

3.3 啓蒙イベント

多くの市民の方に SAV 体験をしていただくファンづくりのための広報イベント。多くの人に知ってもらうために参加者（対話に参加する人）と観覧者（対話には参加しないが見て参加する人）に分け、5グループ程度の SAV サークルを形成し、夫々体験アートビューとブラインドスケッチ⁶⁾をしてもらい、各グループのスケッチ比較や各グループでどんな話が進行したかを確認しあう、ワールドカフェ⁷⁾的な対話型絵画鑑賞イベントになる（写真1、2を参照）。視点の違いや伝え方の重要性などに気づいてもらうことができる。参加人数が多いこと、また対話の過程やブラインドスケッチをみていくことで、結果として5つ美的発達パターンで想定される様々な参加者が混在していたことが体験できる。

3.4 本番イベント

準備イベントや啓蒙イベント参加していただいた方々とリアルに美術館へいき SAV を行う。目の不自由な方はガイドヘルパー⁸⁾と共に参加することをお願いしている（写真3と4を参照）。

SAV 初心者の目の不自由な方は、いきなりナビゲーター役をすることは無理なのでファシリテーターが伴走役として、観る（訊く、問う）、考える、話す、感じる（問う）のサイクルを回すお手伝いをする。

多様な人々との対話から新たな視点を獲得し、新



写真1



写真2



写真3：白杖を持つ目の不自由な方と
共に対話型絵画鑑賞



写真4：目の不自由な方とガイドヘルパーそして
晴眼者と対話型絵画鑑賞

たな刺激や発見を得て歓喜する参加者を多くみてきた。目の不自由な方々は一見すると弱者ではあるが晴眼者者（健常者）をエンパワーメントするパワーを秘めている。

4 インタビューによる先達者とステイクホルダーの意見収集

4.1 視覚障害者で絵画鑑賞をおこなう N さんの行動の原点

5 年前に活動のきっかけになった N さんにあらためてインタビューした。リアルに美術館でおこなってきたソーシャルアートビュー（SAV：目の不自由な方との心の目でみる対話型絵画鑑賞）から、オンラインでも SAV をおこなう意味についてインタビューを行なった。

2020 年 11 月 6 日 （逐語録 N1 から N4 を参照）

インタビューをおこなって分かったことは、絵画そのものの外形的な確認のための対話は必ずしも重要ではない。N さんは、その場にいる人の体験や経験からくるイメージをとらえることで絵画鑑賞を楽しんでいることがわかった。これは VTS の基本にもあるパラフレーズやリフレインそしてリンクング等のアプローチを体現しているのである。

N さんは自分自身の頭の中で、いま鑑賞している絵画の外形的なコトや、イメージ、絵の印象、絵から感じるストーリー、感情など、対話しながら、部品を構成していくように絵の全体イメージを頭の中で作り変え、最終的なイメージを形作るようだ。

SAV では、お互いに知り合おうという気持ちがないより大切に、見えない人の世界を追体験して、相

手を分かった気になること等はとても怖いことだと N さんは思っている。

視覚障害者の N さんから考えると SAV そのものは自身にとっても良いイベントだと感じているが、なかで時々行われたブラインドスケッチは正解をみることが出来ない。“盲人の世界の感覚をとらえてみよう”というワークショップなので、健常者（晴眼者）がいくら、視覚障害者のイメージ形成の疑似体験といっても、視覚障害者と意見の一致を見ることが永遠に無い。視覚障害者といっしょに行うワークショップでの企画には相応しくないと結論づけることができた。

N さんは SAV での楽しさ、歓びについて次のように表現した。「SAV は視覚障害者も健常者（晴眼者）も共に対話のなかから新しい発見や刺激があることが面白く、継続したいイベントだ」。

晴眼者である筆者は準備や開発のためのワークショップではタイムキーパー、鑑賞する絵画の選択と対話のストーリー作成、ファシリテーション役と何役もこなさなければいけないのだが、N さんと開催する（本番）SAV では何時も、ファシリテーターの中の重要な役割である問いかけを N さん中心に委ねるコトができるので落ち着いた運営ができています。

N さん自身も役割を分担できるのは安心してナビゲートできると言ってくれている。そして何よりも何時も新しい発見や刺激を頂戴している。

4.2 とびらプロジェクトの東京都美術館 学芸員 I さんのポリシー

筆者は、まちづくり研究員への応募と並行して、2020 年 4 月より東京都美術館と東京藝術大学

が連携して行っている「とびらプロジェクト」⁹⁾の第9期アート・コミュニケータ「とびラー」¹⁰⁾にも採用され活動をおこなっている。任期は3年間あり、学芸員や大学の教員、そして第一線で活躍中の専門家と学び、約120名の「とびラー」と集い、ソーシャルデザインプロジェクトを实践するプロジェクトである。

「とびらプロジェクト」のミッションは、今後取り組まなくてはならない社会的な課題として、多様性の尊重とそのネットワーク化の2つを取り上げている。一つは人々の価値観や文化背景の違いなどを尊重することであり、二つ目は個々人の生き方を孤立させず、社会の中で関係づけていくことと捉えている。多様な人々の多様な価値観を結びつけていけるアート・コミュニケータが社会の中で機能することにより、誰もが誰をも包摂できるしなやかで柔軟な社会基盤の構築を目指していく。と明記している。(稲庭・伊藤2018)

まちづくり研究は過去3年間の活動の意義や理念再構築を研究するためであり、「とびラー」活動は今後も地域コミュニティ活動を継続させていくエンジンを構築する研究活動だと位置づけている。今後もまちづくりや人とのつながりを持つためにアートコミュニケーション活動を継続していく。トップリーダーの学芸員Iさんにインタビューをおこなった。**2020年11月28日 (逐語録11から14を参照)**

SAVもVTSも、モノを観ながら、モノを皆で認識しあって、世界の解像度を上げていく活動である。知識を深めていく学び方という点で全て共通である。

オンライン・アート・コミュニケーション活動の長所は活かして利用していく。そして解像度を上げて行く企画開発が求められる。

対話はフラットな関係性のなかでおこること。人のありかたが問われる。建設的な世界を自主的にどのように構築していくかが重要なことである。

自分たち自身がエンパワーメント¹¹⁾していく関係性が無いと駄目だ。共に生き、成長する参加者との関係性構築が重要なことである。

Iさんから示唆に富む運営のポリシーに関する考え方を伺うことができた。

インタビューを終え、特に貢献のための対象は組織や場(美術館やギャラリー等)ではなく、ステイクホルダーに啓蒙する立場でもなく、お互いが共に成長する関係性が一番大切であるという根本に気づき共感した。

また従来、啓蒙編と呼称していたイベント名もそれを聞く人によっては誤解をまねくので、共感編などとする配慮があることに気づいた。

オンラインの解像度よりも高い情報量のモノを届けることやフラットな関係性を構築し、共に成長していくスタンスが強い組織を形成していくことだと認識ができ、新たな企画の必要性を感じた。

また今後のSAVの展開のヒントになる、VTC、VTSよりも前にオブジェクトベースドラーニングがあったことに注目できた。

4.3 一般参加者、インターン生の感想

毎回のSAVでヒアリングやアンケート調査をした(感想を抜粋記録)。写真5参照。

一般の参加者についてのまとめ(逐語録S1からS6を参照)

- 1) 初めてお会いする市民参加者同士もアートを介して対話することで短時間だが親密度がまった様子である。本番のSAVは1回のハイブリッド型と2回のオンライン版を実施した。皆さんが伝えるときのボキャブラリーの重要性や順番を意識すること、また質問の切り口の重要性を感じてくれた。
- 2) ハイブリッド版でのSAVのルール説明はとてもやり易い。
- 3) 完全オンラインSAVのルール説明はより解りやすくする必要がある。
- 4) ルール説明の中に画像検索を控えて参加することを伝える必要があった。VTSやSAVでは、まず絵画鑑賞からの情報のみに集中して観察し、分析、対話を重ね、思考をめぐらせていくことが重要で面白い所なのであるが、オンラインSAVだと2つ、3つと複数のデバイスを持って参加する方もいて、画像検索で作品情報を得て

対話に参加する方がいた。その場で注意することも憚れて残念な回があった。

- 5) フラットな交流で対話ができた。個々の個性がわかる。新しい視点を得た。伝え方の重要性を知った。記憶が呼び戻された。等々の感想を踏まえ、効果を意識した新しい企画の必要性がある。

インターン生についての感想まとめ（逐語録 R1 から R9 を参照）

1) 対話について

初期のころは横浜美術館のアートトリエンナーレのオンライン SAV で対話を重ねていった。そこから自主性を尊重しながら得意分野での協力得るようにしていった。「ふりかえり」の重要性を共に確認し毎回のミーティングで「ふりかえり」の対話時間をもうけ、簡単レポートの提出もお願いした。

- 2) インターン生は当初、客観的な説明に多く時間を割かれていたが、N さんのもっと主観的な表現が欲しいという意見に自分たち自身の絵の印象や比喻が N さんにとっての観ることだと気づき始め、楽しさが増していった様子である。
- 3) 体験、練習 SAV の時期は新鮮な感動をおぼえて、感想も素直な驚きを表現する方が多かった。回を重ねるごとに運営面でも工夫すべきことや自分が何を手伝えれば良いのかを自覚して自

発的に意見やアイデアを出してくれるようになった。おかげで、環境面（ノイズキャンセリングマイク&スピーカーの必要性）、IT インフラ面（ZOOM、Slack 等の運用）、企画（デモの重要性等）運営（緊急連絡網の必要性等）の中身もインターン生のアイデア、意見でより良い方向に改善することが出来た。

- 4) コロナ禍の緊急事態宣言発出、延長、再延長などで刻々とスケジュールが変わったが、毎回 3 名以上の自主的な参加エントリーがあり（母数が 11 人のインターン生だからこそ）協力をえることで今期は新しい様式での SAV を実行することが出来た。

- 5) 印象やイメージを積極的に話し、対話の楽しさを感じる事が大切。

想像する楽しさを感じられる。絵を介して対話することで、参加者の物の見方を知りあえる。新しい視点の獲得。SAV は新鮮な体験であった。客観的説明である程度全体像がわかってきたら、鑑賞者の印象や感想を説明してもらえるといい。さまざまな人が交わるコミュニティとなる場を円滑にする SAV。多様な方々と出会えて交流できるのが SAV だ。SAV でも少人数の対話が ZOOM 内のブレイクアウトルームで有効に機能する。等々の好意的かつ建設的な感想が毎回報告された。

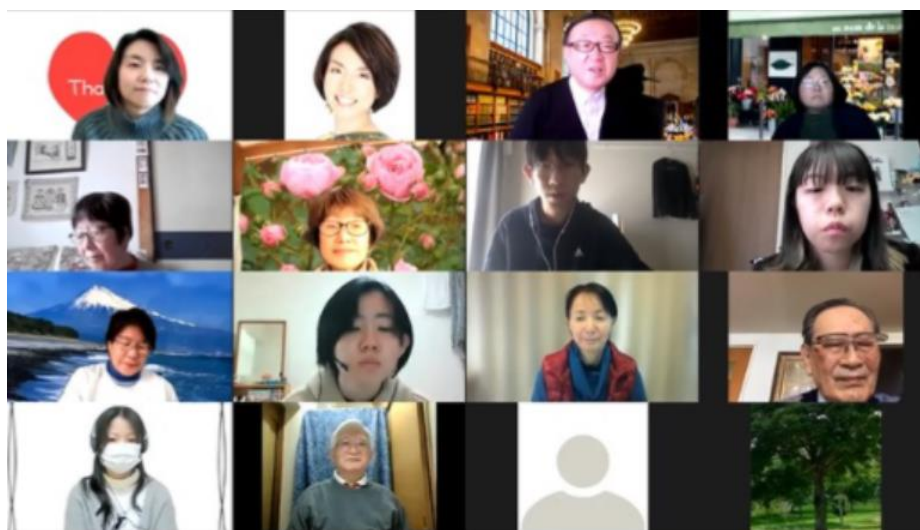


写真 5 全員オンラインで地域活動—お互いを知ろう—に出演、SAV 体験を地域のシニア 13 名とインターン生 3 名で実施／合計 16 名

5 新様式 SAV 実践のまとめ

本章ではコロナ禍の 2020 年度におこなった、新たな様式の SAV の実践についてまとめる。実施団体である、NPO クリエイティブライフデザインに 10 月より東京大学から 4 名、成蹊大学からは 7 名がインターン生として参加してくれることになった。

SAV の目的は、アートを通じて対話の場とそこから広がる「つながり／きずな」を作ることにある。視覚障害者の方や、地域で暮らす一般市民の参加者を交え、絵を見ている人が伝える「言葉」の重なりあいによって、より多角的に今までになかった視点で絵画鑑賞を楽しめることがこの活動の魅力の一つである（写真 6、7 参照）。

新様式のやり方は ZOOM（Web 会議サービスの名称）によるオンラインのみのモノと ZOOM にアクセスしたコトの無い人も参加できるように配慮したオフライン（リアル会場）での対面と、オンラインでの対面を組み合わせたモノ（便宜上ハイブリッド型とも呼ぶ）を準備した。

・危惧した点

- ① インターン生にオンラインでの SAV（練習）で概念を早々に把握してもらえるか、
 - ② そこから若いインターン生のアイデアを活かせるレベルに本番までもっていけるか
 - ③ ZOOM のオペレーションがうまくいくか、
 - ④ オフライン（会場）とオンラインの組み合わせで新しい SAV の構成が組めるか、
 - ⑤ 本番段階で目の不自由な方の参加要請が受入れられるか、
 - ⑥ 視覚障害者を向かえてインターン生がものおじしないで接してくれるかどうか、
 - ⑦ 初めての市民参加者がオンラインで対話型絵画鑑賞をうけ入れて喜んでもらえるか、
- など懸念事項は多々あった。

・気をつけたこと

- ① リアル会場でのハイブリッド型の SAV ではコロナ対策（参加者名、住所、連絡方法の把握、入場前の体温把握、家具備品消毒、手指消毒、マスク着用の確認、ソーシャルディスタンスの確

保、定期的な換気への注意、大きな声を出さない、など）を徹底しておこなう。

- ② リアル参加者は出来るだけ小人数にする（部屋の定員数の半分以下にする。
- ③ 出来るだけゆるやかなつながりがもてるアイスブレイクタイムをもうける。
- ④ ふりかえりの時間を設け「つながり／きずな」へも寄与できる時間帯をかねる
- ⑤ 11 名のインターン生が希望すれば、準備や開発段階のオンラインミーティングに自由に参加できるように努める等でした。

・新様式 SAV 実施日／内容／参加者／実施回数など

- ① 2020 年 10 月 23 日（金）17 時 30 分から 19 時／オンライン接続確認と自己紹介／3 名
- ② 2020 年 10 月 24 日（土）13 時 30 分から 16 時 30 分／武蔵野プレイス_会場環境の確認、エコーキャンセルスピーカーフォンの必要性の確認、ZOOM ホスト機能の確認、絵画の投影の仕方を検討、次回イベントの内容の確認、SAV 練習、等々／オフライン 5 名、オンライン 3 名／計 8 名
- ③ 2020 年 11 月 6 日（金）19 時 30 分から 22 時／視覚障害者の N さんにオンライン・ロングインタビュー、チーム編成で SAV 練習、全員オンラインで 9 名参加
- ④ 2020 年 11 月 20 日（金）13 時 30 分から 16 時／武蔵野プレイスでエコーキャンセルスピーカーフォンテスト、鑑賞用絵画のひとり VTS 練習、チームで SAV 練習、メンバー連絡用環境として slack 使用の打合せ／オフライン 2 名、オンライン 2 名／計 4 名
- ⑤ 2020 年 12 月 11 日（金）13 時から 16 時 30 分／武蔵野プレイスのオフラインとオンライン併用で本番イベント、2 つの絵画鑑賞をオフラインチームとオンラインチームに編成し SAV を楽しむ、オフラインで一般参加者 4 名、スタッフ 4 名、オンラインでスタッフ 2 名、視覚障害者の N さんの 3 名／計 11 名
- ⑥ 2021 年 1 月 9 日（土）13 時から 16 時／本番イベント、インターン生によるデモ SAV をへて、全員オンラインで 2 つの絵画鑑賞を 2 チームに編成し実施、ナビゲーター N さん、MC は筆者、

一般参加者 6 名予定が 3 名、スタッフ 4 名／計 9 名

- ⑦ 2021 年 2 月 10 日（水）10 時 30 分から 12 時／本番イベント、全員オンラインで地域活動—お互いを知ろう—に参加、SAV 体験、地域のシニア 12 名とインターン生 3 名と筆者／16 名

※⑧2021 年 2 月 27 日（土）PM、⑨2021 年 3 月 6 日（土）PM、⑩3 月 21 日（日）AM、⑪3 月 21 日（日）PM の 4 回の SAV イベント本 番企画が 2 度目の緊急事態宣言ならびに再々延長で中止を余儀なくされた。

※さらに⑩、⑪の予定は 2022 年度にずれこんで 4 月 18 日（日）にハイブリッド版（オンラインとオフラインの組み合わせ）で SAV を AM10 時より吉祥寺_西友 1 階 NOMUNO にて、PM13 時 30 分より三鷹スペースあいにて行うことになった（その後、宣言の再々延長により 2022 年 1 月に再延期）

- ⑧ 2021 年 3 月 30 日（火）19 時から 21 時 30 分プロジェクト解散式の予定だったが、全員が来期も継続してインターン生として協力したいと申し出てくれたので、次期コミュニケーション開発装置や仕組みのラボのテーマに発展した。オンラインコミュニケーションツールとしてリアルを感じる装置についてアイデア出しとディスカッションをオンラインでおこなった。

5.1 オンラインとオフラインを組み合わせた SAV 準備段階の記録

2020 年 10 月よりオンラインでのアクセスの良さを生かしインターン生には、参加出来る日時をききながら、強制ではなく空き時間があればオンラインでミーティングと SAV 練習を繰り返してきた。それらを踏まえオフラインとなる武蔵野プレイスの会場でも準備と SAV の練習を重ねてきた。

実際のオンラインとオフラインの環境を共通に繋ぐための、キーデバイスは、エコーキャンセルスピーカーフォンであるというコトもわかり、本番も近かったので 2 種類のスピーカーフォンを購入し直ぐに試した。

何度も練習日を設けることで SAV に興味をもってくれるインターン生が増えた。途中で視覚障害者の N さんのロングインタビューにもインターン生に同席してもらったりして N さんのプロフィールも知ってもらった。学生たちにとっては、初めて目の不自由な方とお会いするのに ZOOM を利用する方が、リアルで会うよりも敷居が低く、コミュニケーションはとり易そうであった。しかし絵画選定の際にどのような工夫をするのかとか、VTS の基本メソッドと SAV でおこなうことの違いを事前に理解してもらうことは困難であった。



写真 6、7 オンラインとオフラインを組み合わせた会場（武蔵野プレイス）

5.2 オンライン SAV 本番の記録

実際に対話型絵画鑑賞 SAV を体感した感想と、対話を通じて絵画鑑賞を行うプロセスの記録。以下に東京大学の D さんを中心とする 4 名のインターン生

による体験記録の要約を掲載する。詳細はむさしの文化アーカイブ¹²⁾のソーシャルアートビューの記事を参照されたい。

～2021 年 1 月オンラインにて～SAV に参加したのは、進行役の林さんの他に、4 人のインターン生と、一般参加で集まった 40 代～60 代の女性 3 人。さらに、全盲の N さんがナビゲーター役として参加。芸術作品を見るグループと作品を見ない/見ることができないグループに分かれ、グループ間で対話をしながら作品を見ているグループが言葉だけでその作品を見ていないグループに伝えていく、対話型グループ作品鑑賞である。

今回は、一般参加の 3 人とインターン生 4 人が、作品を見る A 班と作品を見ない B 班に分かれて SAV を実施。鑑賞したのは、こちらの作品（図 4）。先入観を持たないように、この時点では作者名やタイトルなどの情報は何も与えられずに SAV は始まります。冒頭、ナビゲーターの N さんの「これは絵ですか？」という質問から対話がスタート。絵ですねと A 班が答えると、続けて「縦長？横長？」とまずは作品の外形的な部分を確認していきます。

A 班「風景画？近景画ですね。場所は昔の駅ですね。ヨーロッパの昔の駅という感じで、ホームがきちんとできる前の駅ですね。その時代なので、電車ではなくて、機関車がモクモクと煙を立てながら停車しています。」

N さん「けっこうリアルに描かれていますか？」

A 班「パステルなタッチで、詳しくというよりは、ペタペタペタペタという油絵のタッチで描かれています」

N さん「油が厚塗りされている感じ？」

A 班「そうですね。いろんな色が重ねられながら、全体的にはくすんだ感じのグレーと緑で描かれています。」A 班と N さんの対話だけを材料にて作品を想像していく B 班のメンバーは、思い浮かべた絵を手元の紙にスケッチ。



図 4 『Claude Monet - Arrival of the Normandy Train, Gare Saint-Lazare, 1877』

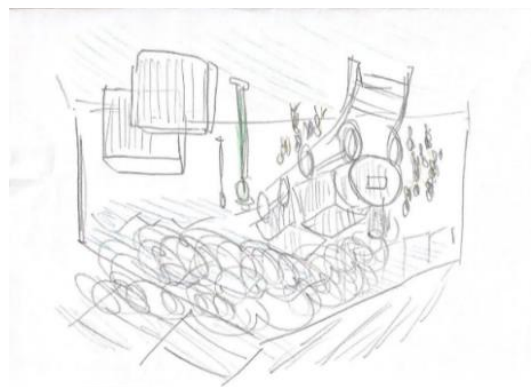


図 5 参加したインターン生のブラインドスケッチ例

そして、途中からはB班のメンバーもスケッチしていく中でわからない点をA班に質問していきます。どこが描かれている？何が描かれている？大きさは？色は？時代は？雰囲気は？タッチは？視点は？などたくさん疑問を解消しなければなりません。普段感覚的に受容している芸術を言葉で説明しようとする、今まで感じたことのないその難しさに直面します。説明してもら側も、イメージの足りないところを補えるように質問することが難しかったりする、無意識のうちに自分で勝手なイメージを作ってしまうがちです。

両班で協力しながら作品を鑑賞していくことが、SAVの難しさであり面白さなのです。また、作品を正確に伝えることだけでなく、コミュニケーション自体を楽しむことやそれを通じて相手を知ること、SAVの大事な要素です。

客観的な情報の伝達に終始するのではなく、絵画の主観的な印象について話すことがより良いSAVには不可欠となります。

対話を重ねてB班もようやく作品（モネの「サン＝ラザール駅」という作品でした）を耳にすると「おー」という声。そしてB班が対話をもとに描いたスケッチを見せると（図5）、A班からは「けっこう伝わっている！」「すごい！」という感想が行き交いました。

スケッチと実際の絵を比べてみたり、実際の作品を見ながらA班の説明を改めて振り返ってみたり作品自体の感想を述べたりして今回のSAVは終了。対話もアフタートークも盛り上がり、充実したSAVとなりました（写真8）。



写真8 視覚障害者でナビゲーターをつとめるNさんと地域のシニアを交えZoomでのSAVを行いました／合計9名

インターン生はA班、B班にわかれてSAVをおこなったことを丁寧に体験記録した。視覚障害者のナビゲーター（Nさんのこと）であることは特別にハイライトを当てて記録はしていない。B班はNさんが全盲であるということを意識せずに役割として、A班に質問を重ねていた。Nさんは両方のチームの人々に興味をもって、A班への質問やB班へのイメージ把握状況などを訊いていた。私はNさんと2名でナビゲーションする時は“合いの手（愛の手）”係として、またフォロー役として機能できるようにし、Nさん自身も参加者も楽しくなるような絵画を吟味して選択している。

……オンラインでの対話はえてして誰がいま話しているのか判らない時もある。SAVの基本ルールとして参加する視覚障害者のために、名前と声色を一致させて覚えてもらうように、「名前を名乗ってから発言をすることを習慣にしましょう」というふうに伝えている。このルールが話者同士、人々の興味の解像度をあげる解決策となっている。また時間のコントロールも視覚障害者でナビゲーターのNさんと一緒にSAVをする場合には晴眼者（健常者）の必須の役割だと思い、立ちまわっている。

6 新様式のまちづくりコミュニケーションを提案する

6.1 ソーシャルアートビュー活動のまとめ

今期の新様式（オンライン、ハイブリッド型）SAVそして従来型のリアルな SAV との比較により、その意義を考察する。

分析・評価・気づき

- 1) SAV は視覚障害者と共におこなう対話型絵画鑑賞実施をゴールにおくと定義し、はじめたコトであるが、視覚障害者の見え方を体験することにより健常者が「観察」、「解釈」などを行い、柔軟な思考に目覚め「問い」探しの対話から、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と社会的な変化を乗り越え、新しい理想社会を創っていく事の重要性に気づくことができる。
- 2) SAV はアートを介してコミュニケーションすることで、人と人がフラットな「関係性」のなかで「つながり／きずな」を持てるワークショップであり、人柄などを緩やかに知ることが出来る。
- 3) VTS では3つの質問を中心に視覚的思考方略のコミュニケーションがされるが、SAV の準備イベントでは視覚障害者の設定が（健常者のみの場合）あり、そこで「問うて、伝える」という基本対話ルールが違和感なく理解することができる。これら1)、2)、3) の SAV の効能が新たな地域活動に活けると想定できる。
- 4) オンラインでの SAV の良さは小声で話さなくても良いが、ギャラリービューなど参加者が多数映る画面上では、いったい誰が話しているのか発見できない時がある。SAV の目の不自由な方の設定があると、名前を名乗ってから話しを始めるルールがオンライン上では「つながり／きずな」の入り口となる。
- 5) 本番のオンライン SAV では視覚障害者が参加する。彼らは最後まで本物の絵画を見て確認することは出来ない。参加した人たちとの対話で人柄を知り、新しい視点や刺激をもらい、新しい物語や記憶のよび起しができ創造の種が生まれることが解った。
- 6) コロナ禍においてオンライン SAV は飛沫感染のおそれが無く、距離を超えてつながれるので仲間

とのコミュニケーションや対話には強力な可能性をもつ環境である。

- 7) オンラインではリアルよりも顔や表情をしっかりと見て対話ができる。
- 8) IT 弱者といわれる高齢者、障害者も既に参加方法が発見できたので、充分 SAV への参加が可能である
- 9) オンラインの地域活動で活躍する方々は場所か、日時を固定させ継続活動を行っているケースが成功ポイントである。
- 10) MoMA での VTS の成り立ちから子供たちへの教育現場での展開が普及し、大人向けそして高齢者向けの開催事例も出てきた（参考文献多数より）。
- 12) インタビューからの気づきは、従来は啓蒙編の SAV を開催していたが「教える／教えられる」関係性では活動が継続しにくい。地域活動は市民活動であり、市民が市民と共に成長していく関係性がないと活動は上手くいかない。イベントタイトルにも配慮がいる（啓蒙から広報／共感イベントに変更する）。
- 13) 鑑賞する絵画の選定時に VTS の美的発達パターンの想定をして参加者募集が出来るようになったら良い。

新様式ソーシャルアートビューの可能性

コロナ禍からゼロ・コロナの時期がきたとしても、オンライン・コミュニケーション利用の機会はますます増えていく。オンライン SAV でのルールやマナーは緩やかなオンライン・コミュニケーションのルールやマナーを学ぶワークショップとなる。

視覚障害者や高齢者もオンライン SAV は実行可能であり、若者を含む、全世代向けの地域福祉や地域共生社会¹³⁾へのインクルーシブ教育¹⁴⁾やSDGs 教育の一翼を担える可能性がある。

リアルに行ってきたオフラインの SAV と新様式（オンラインとオフラインの組み合わせ）の SAV は新しい価値を生む新様式アートコミュニケーションとして、また市民活動のまちづくりコミュニケーションにも役立つワークショップになる可能性を秘めており、新たな地域活動スタイル（「観察」、「解釈」、など、柔軟な思考に目覚め「問い」

探しの対話の重要性に早期に気づくコミュニケーションスタイル)として更にツール開発やワークショップデザインに進化を図っていく。

6.2 運営の担い手たちのこと

インターン生とはインタビュー調査でも明らかになったように共に成長する関係性をもち、自分たち自身がエンパワーメント(能力開花や権限付与)していく。

高齢スタッフには丁寧なICTスキルの学習機会をもうけ、学生と同様にエンパワーする関係性を構築していく。

老若男女問わず広義のエンパワーメント(「湧活」人々に夢や希望を与え、勇気づけ、人が本来持っている素晴らしい生きる力を湧きださせること)が出来る環境を考慮し運営する。

7 新たな地域活動スタイルへ SAV の活用提案

健常者が観て、考え、話し、イメージする行動(VTS)と目の不自由な方が問い、考え、話し、感じる行動(SAV)が同じ対話空間でシンクロナイズすることにより、新たな発見や物語、イメージが生まれ易いことを図6のように行動の違いで図解してみた。

これらは後に示す行動のSECIモデル¹⁷⁾と12の知識創造行動¹⁶⁾と比較することで、関連が深いことが想起される。

ぐるぐると繰り返される対話によって(観て、訊いて)刺激しあう⇒(考えて)アイデアを表に出す⇒(話して)まとめる⇒(感じて、イメージする)自分のものにするという知識創造行動と同じエネルギーがVTSやSAVから創出される。



図6 VTSとSAVの行動サイクルの違いと行動のSECIモデル¹⁷⁾との関連を思考するために筆者が加工して書いた図

また健常者の観て考える行動と目の不自由な方と心の目でみる対話型絵画鑑賞により、感じて、イメージする行動は新たなモノやコトを生み出す原動力となる。

目の不自由な方が実際のイベントに参加していなくても、目を使わないで対話型鑑賞する役割の人やチームを設けることで対話や思考のサイクルが回り易くなる。

VTSとSAVの型を組み合わせたワークショップを繰り返すことで、12の知識創造行動¹⁵⁾の駆動力となる。

筆者はファーストキャリアでニューオフィスの研究やクリエイティブなオフィスづくりの提案・普及啓蒙活動も担当していた。こうした関係で、ニューオフィス推進協議会¹⁵⁾「12の知識創造行動とクリエイティブワークプレイス¹⁶⁾」の考え方が地域活動の場づくりにも応用できると考えた。

ニューオフィス推進協議会の研究レポートでは、行動のSECIモデル¹⁷⁾として「刺激しあう」「アイデアを表に出す」「まとめる」「自分のものにする」におきかえて、12の知識創造を誘発する行動を図7のように具体化している。

アートコミュニケーション活動の中のVTSやSAVの考察を重ねてきて、この活動の対象は一般市民から若者、視覚障害者のみならず弱者/高齢者と拡張できると確信をもった。

新たな意義として多様な市民との出会いが楽しいSAVイベントから誘導され、多様性のある交流の重要性に気づく。そして「つながり/きずな」が生まれ、伝播していく活動であるということである。

組織運営のスタンスはフラットで平等であり、シンパシー(共感・共鳴)の展開からエンパシー(他者の感情や経験を理解しようとする能力や、分かち

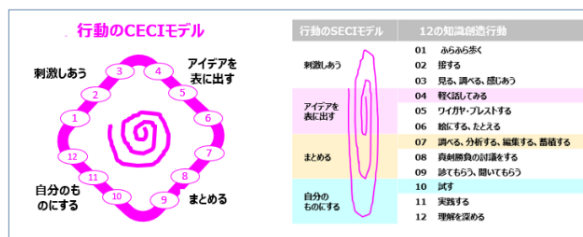


図7 行動のSECIモデルと12の知識創行動の図表を、VTSやSAVの行動サイクルと関連付けて思考するために筆者が加工して書いた図表

合おうという知的作業へとエンパワーメントする／される関係性に成長する。

段階に応じた、対話の場を形成し、IT 市民による（地域課題を解決する）まちづくりコミュニケーションを活発にする。その駆動力となる VTS や SAV を取り入れたアートコミュニケーションから「観察」、「解釈」など柔軟な思考で「問い」探しの対話ができるハイブリッドコミュニティの形成をすることを提案する。

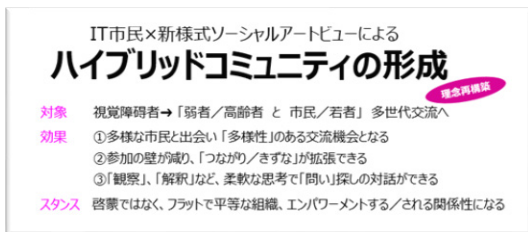


図 8 地域活動スタイル提案のキーワードまとめ

このような地域活動スタイルがまちづくりの課題解決や創造のためのコミュニケーションの充実・発展に大きく貢献する可能性をもっている。(図 8)

8 おわりに——今後の課題——

インタビューや新様式の SAV を企画、実践したことにより、ネットワーク型のコミュニケーション活動として地域福祉や地域共生社会に貢献していけることが見えはじめた。

対話をすることによって出てきて欲しいコトは、N さんの言う「ここを通した言葉」を交わすことによって「感じる」が深まっていき、新しく「イメージ」が形成されていくことである。

視覚障害者のイメージの仕方や、コンセプト立案のためのワークショップにおいて、定義した「言葉」から新しい「イメージ」はどのように創造されていくか、という探求テーマは引き続き研究していく課題として残る。

これは「言葉」から各種プロジェクトのコンセプトを決定することや、コンセプトの「言葉」からイメージをどのように創造し、具現化していくかの研究として、ひきつづき「とびラー」のラボ仲間と探

求していく。

次期の「民学産公」協働研究事業では、新様式の SAV 活動を市民活動のまちづくりコミュニケーションにも役立て、新たな地域活動スタイル（「観察」、「解釈」など、柔軟な思考に目覚め「問い」探しの重要性に早期に気づき、他者の感情や体験を理解しようとするエンパシーをひきだす対話スタイル）として更にツール開発やワークショップデザインの開発、提案を行っていく。

【注】

- 1) ソーシャルアートビュー (SAV) (商標登録第 6225167 号、出願番号 2019-046726、出願日 2018 年 4 月 2 日、登録日 2020 年 2 月 12 日)
- 2) アートプロジェクトとは作品そのものより制作のプロセスを重視したり、美術館やギャラリーから外に出て社会的な文脈でアートを捉えたり、アートを媒介に地域を活性化させようとする取り組みなどを指す。まちなかや生活空間のなかで開催され、アーティストだけでなく様々な関係者・参加者と共に取り組む共創的な表現活動のこと。
- 3) TURN とは障害の有無、世代、性、国籍、住環境などの背景や習慣の違いを超えた多様な人々の出会いによる相互作用を、表現として生み出すアートプロジェクトの総称。2015 年、東京 2020 オリンピック・パラリンピックの文化プログラムを先導する東京都のリーディングプロジェクトの一つとして始動した後、2017 年度より、東京 2020 公認文化オリンピックとして実施。オリンピック・パラリンピックが開催される東京を文化の面から盛り上げるため、多彩な文化プログラムを展開し、芸術文化都市東京の魅力を伝える取組。TURN はその一環として展開中。
- 4) ソーシャル・インクルージョン (社会的包摂) とは、社会的に弱い立場にある人々をも含め、市民ひとりひとり、排除や摩擦、孤独や孤立から援護し、社会 (地域社会) の一員として取り込み、支え合う考え方のこと。
- 5) 地域包括ケアシステムとは、高齢者が住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、「住まい」「医療」「介護」「予防」「生活支援」が切れ目なく一体的に提供される体制のこと。厚生労働省においては、団塊の世代が 75 歳以上となる 2025 年を目途に、高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、地域の包括的な支援・サービス提供体制 (地域包括ケアシステム) の構築を推進している。
- 6) ブラインドスケッチとは健常者 (晴眼者) が目の不自由な方 (視覚障害者) のモノ見え方を体感するために、SAV 準備イベントで目の見えない方の役割をして対話により絵をみないでスケッチをすること。

- 7) ワールドカフェとは何人かの会議での討論のやり方（ファシリテーション）の一形式。各参加者が対話を通じて「気づき」を得ることを目的とする。1995年に米国のファニータ・ブラウン（Huanita Brown）とデイヴィッド・アイザックス（David Isaacs）が偶然の機会に行う状況になり始まったといわれている。フォーマルな会議よりも、移動も自由なオープンな打ち合わせで行うほうが発想が豊かになり、意見も活発になるという思想に基づく
- 8) ガイドヘルパーとは移動介護従業者のこと。各地の都道府県知事の行う研修を修了した者。外出介護員とも呼ばれている。
- 9) とびらプロジェクトとは美術館を拠点にアートを介してコミュニティを育むソーシャルデザインプロジェクト。「とびらプロジェクト」は、東京都美術館が東京藝術大学と手を組み 2012 年に始動。2つの組織が連携してプロジェクトを推進。広く一般から集まったアート・コミュニケーター「とびラー」と、学芸員や大学の教員、そして第一線で活躍中の専門家がともに美術館を拠点に、そこにある文化資源を活かしながら、人と作品、人と人、人と場所をつなぐ活動を展開している。
- 10) とびラーとはアート・コミュニケーター「とびラー」のこと。「とびラー」とは、東京都美術館の「都美（とび）」と、「新しい扉（とびら）を開く」の意味が含まれた愛称。任期は3年間。アートを介して誰もがフラットに参加できる対話の場をデザインし、様々な価値観を持つ多様な人々を結びつけるコミュニティのデザインに取り組んでいる。
- 11) エンパワーメントとは、もともと「力を与えること」を意味します。ビジネス現場では、「権限移譲」「自律性促進」「能力開花」などの意味で使われる。看護や介護の分野でのエンパワーメントはサービスを利用する者が自立することを最終的なゴールとして、自分自身が日常生活で人生の主役となれるよう、自己選択を行い、生活や環境をコントロールできるように支援を行う。社会福祉におけるエンパワーメントでは、社会的弱者が自分の置かれている立場や問題の要因に気付き、状況改善に必要な方法や自信回復、決定力の強化をするための援助や理念を指すこともある。
- 12) むさしの文化アーカイブ（Musashino Culture Archive：通称 MoCA）では武蔵野市内の様々な人・場所・活動などを調査し、WEBサイトで公開することで武蔵野市の文化を記録していくことを目指している。東京大学文学部の社会学演習（小林真理ゼミ）を履修する学部生と大学院文化資源学専攻の文化経営学演習を履修する大学院生によって企画・運営。一部の学生が NPO クリエイティブライフデザインのインターン生として参加中。https://moca.kobayashi-lab-cm.org/
- 13) 地域共生社会とは、厚生労働省が掲げるビジョン。2016年6月に閣議決定された。地域住民や地域の多様な主体が分野や属性の壁を越えた協働を実践し、誰もが支え合う地域を創っていくことを目指すこと。
- 14) インクルーシブ教育とは、人間の多様性の尊重等を強化し、障害者が精神的および身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能にするという目的の下、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組み。
- 15) ニューオフィス推進協議会とはクリエイティブ・オフィス運動を始め、オフィスセキュリティマーク認証制度の普及や、調査研究事業のさらなる充実、積極的な広報事業等を推進する業界団体。筆者は1st キャリアでニューオフィス第二指針の策定やオフィスセキュリティマーク委員、クリエイティブ・オフィス普及セミナー講師を担当していた。
- 16) 12の知識創造行動とクリエイティブワークプレイスでは、感性や創造性を育て、新たな知的価値を創造していくために、これまでの事務作業を処理するための仕事場から、新たなアイデアをより膨らませていくようなオフィスを実現するために、職場でのコミュニケーションを増やし情報共有を深化させることがより重要としている。クリエイティブ・オフィス・レポートでは、ニューオフィス推進協議会内に学識者、関係ベンダーの実務者からなる基本方針及びモデル構築等の検討を行なった。知識創造を促す行動を12の行動要素に分解したものが「12の知識創造行動」。「クリエイティブワークプレイス」とは、それらの知識創造行動を誘発する空間。「12の知識創造行動とクリエイティブワークプレイス」<https://www.nopa.or.jp/copc/report02.html>
- 17) 行動のSECIモデルは、野中郁次郎氏が提唱した組織的知識創造理論・SECIモデルが検討のベースとなっており、S「暗黙知→暗黙知」 E「暗黙知→形式知」 C「形式知→形式知」 I「形式知→暗黙知」という4つのプロセスに区分している。

[文献]

- 稲庭彩和子・伊藤達矢 2018『美術館と大学と市民がつくるソーシャルデザインプロジェクト』青冬舎
- 梶谷信二 2020「<アート×哲学対話>がひらく共生の新たな可能性」『想像を広げる TURN JOURNAL-SPRINGS 2020』pp. 28-29 より
- カール・ロジャース／畠瀬直子監訳 1984『人間尊重の心理学—わが人生と思想を語る—』創元社 pp. 6-21 より
- 東京都美術館×東京藝術大学 とびらプロジェクト HP とびらプロジェクト (10 段目) 私たちの目指すこと より <https://tobira-project.info/about/#concept>
- 長井理佐 2011「VTS(Visual Thinking Strategy)と学習支援—構成主義的学習における支援のありかたをめぐって—」
- 渡部晃子 2011「フィリップ・イェナウインの教育とそのカリキュラム開発」『美術教育学』第 32 号、pp. 493-503 より

— 謝 辞 —

[参考文献]

- 伊藤亜紗 2015 『目の見えない人は世界をどう見ているのか』、光文社新書
- 上野行一 2011 『私の中の自由な美術—鑑賞教育で育む力—』、光村図書出版
- 大橋謙作 [編著] 『—講座ケア—新たな人間・社会像に向けて・2—ケアとコミュニティ福祉・地域・まちづくり—』ミネルヴァ書房
- 加藤悦子他 2016 「美術作品を中心とした視覚媒体を活用した教育の研究—VTS 美術鑑賞教育を日本に適用した教育方法の形成—」
- 河村孝 2018 『明日のまち「三鷹」を考える』、ぶんしん出版
- 小地沢将之 2020 『まちづくりプロジェクトの教科者』森北出版株式会社
- 末永幸歩 2020 『—自分だけの答えが見つかる—13歳からのアート思考』ダイヤモンド社
- 田所承己 2017 『場所のでつながる/場所とつながる—移動する時代のクリエイティブなまちづくり』
- ニューヨーク近代美術館 (MoMA) 監修オンライン講座資料 <https://www.coursera.org/moma>
- 橋本智他 2012 「Visual Thinking Strategy (VTS)の日本語教育への応用を考える」
- 林容子 2020 『—認知症のうつ・イライラを改善する対話型アート鑑賞プログラム—アトリップ入門』誠文堂新光社
- マルティン・ブーバー著／植田重雄訳 1979 『我と汝・対話』岩波書店
- 山崎亮 2016 『コミュニティデザインの源流—イギリス編』太田出版
- 若生真理子、清水たま子 2017 「対話型鑑賞教育 (VTS) を応用した対話力の育成法を探る」

本論文の作成にあたり、多くの方々に多大なご支援、ご協力を頂きました。

本研究にご協力を頂きました方々、特に長時間のインタビューに真摯に対応していただいたNさん、Iさんに深く感謝を申し上げます。

プロフィール

林 賢 (はやし まさる)

- ・1st キャリアをおえ、2nd キャリアと併行して土日の地域貢献組織、NPO クリエイティブライフデザインを設立。試行錯誤をへてアートコミュニケーションのワークショップやソーシャルアートビューを開発、実施中。
- ・問いをもって生き、創造的な生活を提案し、他者に貢献することで、多幸感につながると信じ、活動を行っている。
- ・2020年度から東京大学_小林真理先生、成蹊大学_川村陶子先生の推薦を得てインターン生は15名。

< 関連活動 >

- ・三鷹ネットワーク大学
まちづくり総合研究所 研究員
 - ・東京都美術館×東京藝術大学_9期とびラー (アート・コミュニケーター)
 - ・NPO クリエイティブライフデザイン 代表理事
npocld@gmail.com
 - ・地域福祉団体 Next Door Team (隣組)10 代表
88shiken@gmail.com
-